

大坂武士 情報源の変遷

◆江戸時代初期◆

大坂における幕府行政機構の確立

元和5年(1619)大坂城代・東西町奉行
元和9年(1623)京橋口・玉造口定番

大坂市街地の復興・経済の発展

幕府による大坂直轄化
地子銀免除

復興成った大坂の地域情報の必要性→大坂人のための大坂情報の刊行

(1) 大坂武士情報、大坂の地誌に登場

『難波雀』延宝7年(1679) 1冊 大坂の商工名鑑・市政要覧
※冒頭に大坂城代・城番(定番)・町奉行などの幕政機構+在坂蔵屋敷の情報

『摂津難波丸』元禄9年(1696) 6冊 } ほぼ構成は同じ
『国花万葉記』元禄10年(1697)
『難波丸綱目』延享5年(1748) 7冊

※第1冊:大坂城代・城番(定番)・町奉行・蔵屋敷に加え、代官、与力同心など、より町人の生活に密着した情報が含まれるようになっている。

情報量の増大による大部化!!
軽量化を図る。

(2) 『大坂武鑑』～大坂武士情報の独立～

『大坂袖鑑』享保13年(1728) 1冊
『大坂武鑑』延享2年(1745) 1冊

※収録情報は、『難波丸綱目』と基本的に似ているが、

- ①摂津和泉の藩情報が消え、幕政情報に特化。
- ②東西両奉行所の与力同心だけ、役職・役宅所在地がわかるようになった。

不定期刊行

定期刊行化の必要
さらなる軽量化→情報の取捨選択

(3) 『浪華御役録』の登場～大坂武士情報の定期刊行～

『浪華御役録』元文4年(1739) 裏表1枚

刊行頻度・形態

- ① 長期にわたる刊行
元文4年(1739)～慶応4年(1868)までほぼ130年にわたって刊行
- ② 軽量化・コンパクト化
縦30cm×横40～60cm程度の表裏一枚刷を折りたたんで帯封に入れられていた。
- ③ 定期的刊行・刊行頻度の増加
初期の刊行時期は不明だが、途中からは年頭と八朔(8月1日)に刊行された。また、「張り出し」という紙片を添付して追加情報を入れているものもある。

定期刊行化
超軽量化

収録内容

- ① 蔵屋敷の情報が消え、より幕政中心の情報となり、なおかつ役方(町方支配)の役職情報が優先されている。(大坂城警護の大番頭、加番などの情報は少ない。)
- ② 表面：基本的に6段組で右から左へ。
1段目、大坂城代以下役職者の一覧。
2段目東西町奉行、船奉行、堺奉行、定番配下の六役奉行(破損・弓・鉄砲・具足・金・蔵)。
3・4段目与力、5・6段目同心の役付情報。
- ③ 御用日(町奉行所にかけている民事訴訟の審理の日)の記載。
- ④ 裏面：与力同心の屋敷図。三郷惣年寄など民間市政担当者の一覧。

大坂町人が
必要な情報

(参考) そのほかの大坂武鑑～『大坂使用録』～

- ① 天保10年(1839)・11年(1840)の刊行が確認されている。
天保10年は『大坂袖鑑』『御役録』も刊行されていた。
- ② 大坂市中むけの『大坂袖鑑』等に対し、摂津・河内・和泉・播磨という広い範囲を対象としていた。たとえば、『大坂袖鑑』等で省かれてしまった、摂河泉播四力国の大名や、『御役録』で省かれた代官などを含む。

(注) 書名の横に記入している刊行年は、それぞれ現在確認されている中で最も古い刊行年と考えられるものです。

※本稿の作成にあたり、『武士の町大坂』(藪田貫著 中央公論新社)を参照しました。